第 5 回　ジヴェルニー「モネの庭」で

2006 年 5 月、これまでのような国際学会参加に便乗してということではなく、妻と観光目的のフランス旅行をした。5 月の陽光のもとで、パリからジヴェルニー、オンフルール、モンサンミシェル、トゥール、ロワール（シュノンソー城、シャンボール城、シャルトル大聖堂）等の観光スポットを訪れ、豊かな農業国フランスの自然と世界遺産の美しさを楽しんだ。

ジヴェルニーには、印象派の巨匠クロード・モネ（1840-1926）がセーヌ川支流のエプト川の水を引いて自ら造ったといわれる「水の庭園」と「モネの家」があり、季節柄庭園には何百種類もの花が咲き乱れていた。モネのアトリエから徒歩で数分のところに睡蓮が浮かぶ広々とした水の庭園があり、日本式mp太鼓橋もかかっていた。モネは 1883 年からその死までの 43 年間をその地で過ごしたとされる。

モネがヨーロッパ画壇に登場した 19 世紀の中葉には、印象派の祖といわれるエドウァール・マネ（1832-1883）が創作活動していた。マネは、それまでの伝統的なヨーロッパ絵画に革新的な考え方を吹き込んだが、当時の社会には賛否が渦を巻き、サロンで二等賞を取り無鑑査の資格を得たのはその死の 2 年前のことである。筆者の幼友達の画伯 I 君から最近露呈された「沈黙の絵画-マネ論」（ジョルジュ・バタイユ著,宮川　敦訳,第 7 版,二見書房,1996 年）によると、マネはそれまでの絵画のテーマ性や関連性などを無視して、19 世紀パリジャンの心の闇に潜むニヒルな作品を次々と発表していき、当時の画壇から非難を浴びたが、その独特の虚無感覚はモネをはじめとするのちの印象派の画家達に大きな影響を与えた。その一方では、マネの感覚は彼らの理解度を遥かに超えて遠く進んだものであった。I 君によれば、バタイユはマネのすばらしさを王威という言葉を用いて、ダビンチやゴヤに匹敵すると世界に紹介している。

産業革命やフランス革命などを経験した当時のヨーロッパが現存の社会機構や個人の精神構造などが激変せざるを得ない情況であったことを考えると、当時登場してきた芸術家達にとっては、伝統という鬱陶しい殻を破るべく制作意欲がいやがうえにも盛り上がって、怒涛のように押し寄せてきたのであろう。絵画ばかりでなく、音楽や彫刻などにしても、19 世紀を中心としたその時代の芸術作品には今も心をときめかすような傑作が多いと思うがどうであろうか。

太陽光線下の自然の色彩感覚を正確に表現しようとした印象派の絵画は、近代絵画の出発点になったといっても過言ではない。印象派ののち、19 世紀から 20 世紀にかけて、後期印象派、ナビ派、立体派（キュービズム）、野獣派（フォービズム）、表現主義、抽象主義、超現実主義などが出現しており、現在もなお次々と新しい絵画の表現方法が生まれてきている。

後期印象派に属するポール・セザンヌ（1839-1906）は、外光を重んじた印象派を批判し、絵画における構図や形態を重視した。「モネは単なる眼にすぎない」とも言ったというセザンヌは、ものを立体的にみる新しい絵を作ろうとした。セザンヌは、後の立体派につながったが、近代絵画の父とも評価されている。

美を感じることは通常の前頭前野機能を有する人間であれば可能であるが、それに対する感動の度合いは個人で異なっている。感動や関心の程度の差は、個人の人生における多種多様な学習の質と量が多少とも影響するであろうが、歴史的に傑作とされる芸術作品には普遍的かつ絶対的ともいえる美しさがあるのを否定できないと思う。I 君に言わせると、このようなことこそ、バタイユが「沈黙の絵画-マネ論」で示唆した「王威」というものかもしれないということである。

自然の美には、自然そのものから直接感じて伝わる美と、ヒト個人の感性の波長に同調しているような画家を通して伝わる美とがあり、後者の方が長期間濃厚に記憶に残るのだと思う。

2006 年 5 月ジヴェルニーの「水の庭園」と「モネの家」を巡りながらそのようなことをとりとめもなく考えた。